湘南短期大学紀要，18，33 − 40，2007.

# バイリンガル国における幼児英語教育の実態
## −シンガポールを事例として
# English Education at the Kindergarten Level in a Bilingual Country
## - A Case of Singapore

奥 村 真 司
Shinji Okumura

## 1. はじめに

シンガポール共和国は、マレー半島の南端に位置する小国で、国の総面積が620万㎢と、淡路島と同程度である。この国は過去にイギリスの植民地として栄え、1965年にマレーシアから分離、独立した。国民人口（永住権取得者を含む）は、355.3万人で、そのうち76.8%が中国系、13.9%がマレー系、7.9%がインド系、1.4%がその他である（census 2000）。このような多民族社会において、マレー語、中国語（北京語）、タミール語、英語が公用語となっており、その中でも英語は政治、経済、教育等の主要言語としての地位を確立している。

シンガポールで英語が重要視されている背景には、シンガポールが旧イギリス植民地であったことが挙げられるが、現在では多民族国家における民族相互理解と、諸外国からの知識や技術の導入のために大きな役割を果たしている。

シンガポール社会での英語の役割を一層強固にしたものに、二言語政策が挙げられよう。政府は小学校教育からのすべての教育段階において、英語と各民族の母語であるマレー語、中国語（北京語）、タミール語のうちの一つを必修とした。この二言語政策では、英語が教育現場での第一言語として扱われていることから、小学校での英語習得は、ほとんどの教科の内容理解に関わるとともに、子どもたちの先々の進路に大きな影響を及ぼしている。英語がシンガポール人の子どもたちの将来にとって必要不可欠なものであることは言うまでもない。

シンガポールの教育制度では、小学校1年生から4年生までの基礎段階終了後、児童はそれまでの成績によって、2年間のオリエンテーション段階であるEM 1からEM 3の3コースに振り分けられることになる。EM 1はシンガポール全児童のうち上位約20%が進むクラスであり、上級英語と上級母語の授業を受ける。EM 2は、全体の約70%で、普通の進度のクラスである。下位約10%の児童はEM 3へ進む。EM 3は2言語と算数の習熟が遅い児童のためのもので、このコースでは基礎英語、基礎母語並びに基礎算数を学ぶ。このコースには他のコースで学ぶことになっている理科が含まれていない。その後6年生の卒業時（10月初旬）には、小学校卒業認定試験（PSLE）が課せられており、その成績に応じて中学校で学ぶべきコースが決定される。またその先にも、子どもたちの進路によって、いろいろな試験が課されている（シンガポールの教育制度の詳細については図1参照）。

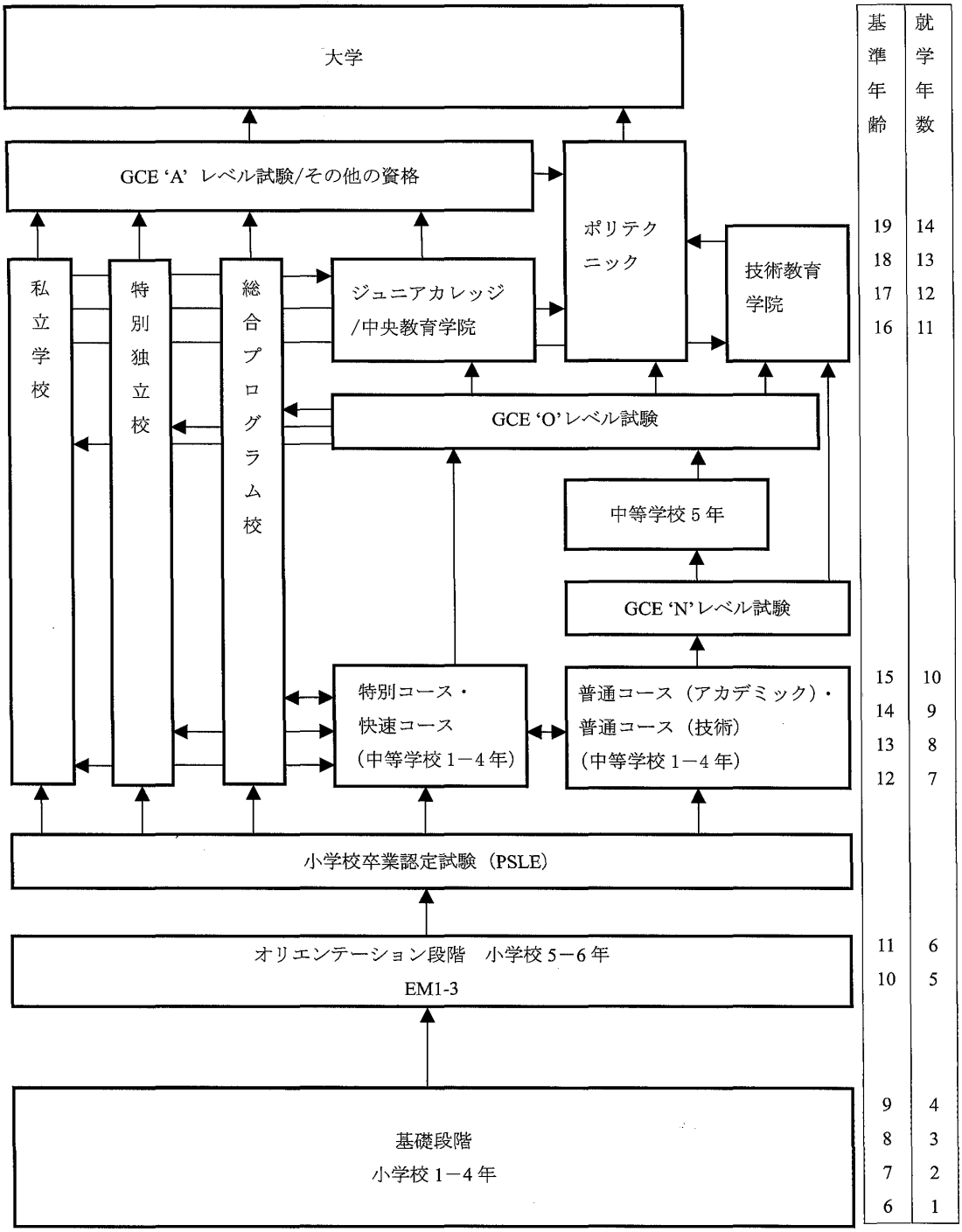


図 1. シンガポールの教育制度

（Ministry of Education, Singapore: The Education System at a Glance (2005)をもとに筆者が作成。）

表 1. 5 歳～14 歳国民の家庭での使用言語（%）

| 民族 | 使用言語 | 1990年 | 2000年 |
|---|---|---|---|
| 華人系 | 英語 | 23.3 | 35.8 |
| | 華語 | 57.6 | 59.6 |
| | 中国方言 | 18.9 | 4.3 |
| | その他 | 0.2 | 0.4 |
| マレー系 | 英語 | 8.3 | 9.4 |
| | マレー語 | 91.6 | 90.1 |
| | その他 | 0.1 | 0.5 |
| インド系 | 英語 | 39.6 | 43.6 |
| | マレー語 | 18.4 | 12.9 |
| | タミール語 | 35.6 | 36.3 |
| | その他 | 6.3 | 7.2 |

出典： Census of Population 2000, Advance Data Release.

Chapter 4 Literacy and Language

一方シンガポールでは、家庭においても学齢期の子どもたちの英語使用が増加していることが報告されている。表 1 は、2000 年に行われた国勢調査による、主要 3 民族の 5 歳から 14 歳までの国民が家庭で最も使用する言語について示している。総じてどの民族においても、1990 年と比較して2000年には英語使用が増加している。これはやはり、学校での第一言語が英語であることが要因となっていると言える。また、Sharp (1997) は、教育レベルの高い保護者の家庭ほど、家庭内での英語使用比重が高いと指摘している。

小学校からの教育制度において英語が重視されていることと、それにともなう家庭での英語使用の増加により、保護者が就学前英語教育に大きな期待を寄せることは容易に想像できる。すなわち、小学校でよい成績を収めるために、そのスタートとなる幼児教育は重要になるということである。近年日本でも、早期英語教育への関心が高まっているが、子どもたちの将来を決定づけるものには至っていない。バイリンガルのエリート教育を行うシンガポールにあってこそ展開される、早期英語教育の実態があると考えられる。そこで本研究では、シンガポールにおける幼稚園英語教育の実態を調査することとした。英語を第一言語としているバイリンガル国の幼児英語教育はどのように行われているのであろうか。

## 1．シンガポールの幼稚園教育

### 1-1. 制度

シンガポールの就学前教育制度は、教育省 (Ministry of Education: MOE) 管轄の幼稚園と社会開発青年スポーツ省 (Ministry of Community

Development, Youth and Sports: MCYS）が所管するチャイルド・ケア・センターに二分される。本研究では、学校法（Education Act）の下「学校」と認められている、幼稚園における英語教育に焦点をあて、幼稚園制度についてのみ言及する。

シンガポールの幼稚園は、教育省から許可を得た宗教団体や社会団体など民間によって運営されている。対象年齢は一般的には３歳児から５歳児までで、３年間の教育プログラムのうちに、Nursery、Kindergarten 1（K1）、Kindergarten 2（K2）という３つのクラスを進んでいく。各年とも１月から始まる10週単位の４学期から成る。１週間においては、月曜日から金曜日までの週５日制、１日は３～４時間である。多くの幼稚園は、午前・午後の２部制をとっている。

### 1-2. 幼稚園教育の役割

シンガポールの幼稚園教育は、これまで主に小学校１学年の準備をねらいとしていたため、そのカリキュラムは教師が教科内容を教え込むようなものであった（Sharp, 2000）。しかし現在では、教育省が2003年に幼稚園教育の指針となる A Framework For A Kindergarten Curriculum In Singapore を発行し、幼稚園教育を単なる小学校への準備コースではなく、生涯教育への準備段階として子どもたちに豊かな経験と機会を提供するものとしている。そのため、カリキュラムは教科統合型のテーマ中心アプローチ（Thematic Approach）[1]を取り入れるようになった。またこのフレームワークには、「思考は言語と強く結びついており、思考の発達のためには言語発達が必須である」ということが記されており、言語技能の習得にも重きが置かれていると言える。小学校同様、幼稚園においても英語と母語の２言語が教育言語であるとともに、Nursery から K2 までの各レベルの学習では、日常的なプログラムとして２言語の基本的運用能力と読み書き能力の向上が目標とされている。言語技能育成は、形式を重視した機械的な言語ドリルの活動ではなく、ロールプレイ、歌、ライム[2]やリーディングなど言葉の意味や使用に焦点を当てた言語活動を行うことが重要視されている。

## 2．幼稚園における英語教育の実際

### 2-1. St.James Church Kindergarten の概要

シンガポールでの幼児英語教育の実際を考察するため、筆者は2006年２月に、キリスト教系の幼稚園である、St.James Church Kindergartenを訪問し、英語授業を見学した。この幼稚園では、MOEが定めるNursery、K1、K2の３つのクラスに加えてPre-Nursery Play Groupを加えた４クラスを設置し、午前（8:15 a.m.－11:15 a.m.）と午後（11:30 a.m.－2:30 p.m.）の２部制で教育を行っている。各クラスともに教員数は２名であり、Pre-Nursery Playgroupでは１クラスの収容人数を最大で14名としている。Nurseryは最大収容人数20名、K1 とK2 はともに30名となっている。

この幼稚園では学校法に定められているように、英語と中国語の２言語によるバイリンガル教育を行っている。英語教育については、英語だけを使用する直接教授法により、フォニクス[3]やストーリーの読み聞かせ、またクリエイティブライティングなどを取り入れながら読み書き能力の向上をねらっている。中国語教育については、聞く、話す能力の向上を主とした授業が行われている。

### 2-2. 英語授業の実際

St.James Church Kindergarten での英語教育が、読み書き能力の向上を第一目標としていることから、本研究においては、K1 と K2 の読み書き指導の実践を見学することとした。各授業の概略は以下の通りである。

K1 クラスは、フォニクスを通して、アルファベット V, Q, X, Y, Z の大文字と小文字を学習するものであった。授業は導入として、歌と絵本の読み聞かせから始まった。その後教師は、各アルファベットの文字を含む単語をカードに

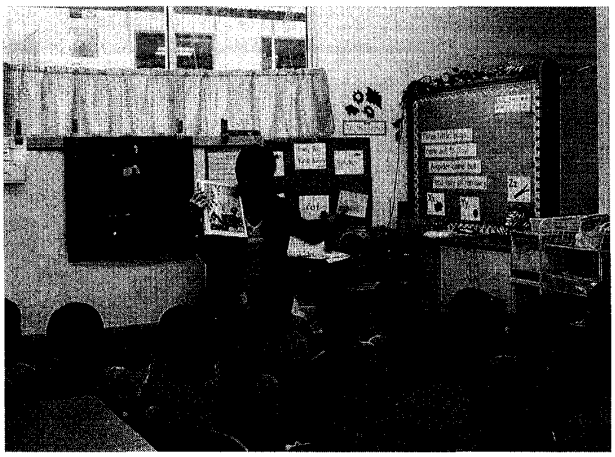

**写真１　K1 の授業風景**
物語の読み聞かせの様子（筆者撮影）

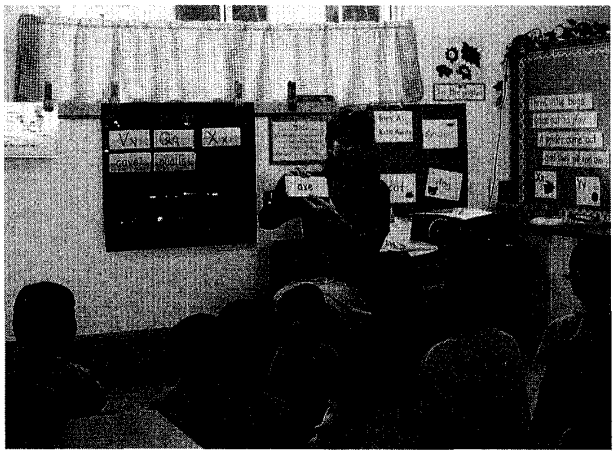

**写真２　K1 の授業風景**
アルファベットの文字を含む単語をカードによって提示している様子（筆者撮影）

よって提示した。例えば、V/v を含む単語として、cave, wave, live、Q/q は quick, question, quilt、X/x は wax, exit, mix、Y/y には yard, year, young、Z/z を含む単語として zip, dizzy, puzzle などが取り上げられた。教師は、子どもたちにそれぞれの単語の発音を練習させるだけでなく、ジェスチャーや言い換えなどにより語の意味も理解するように促していた。

授業の後半では、アルファベット V/v, Q/q, X/x, Y/y, Z/z をゲームで練習する活動が行われた。具体的には、子どもが教師の持つ袋から、絵カードを１枚とり、その絵が示す単語が V/v,

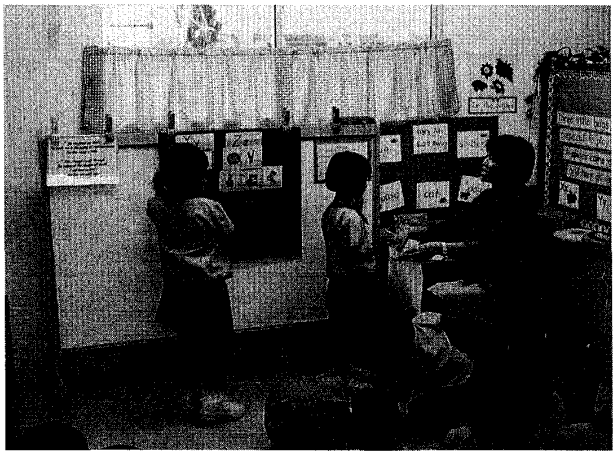

**写真３　K1 の授業風景**
アルファベットをゲームで練習する活動（筆者撮影）

Q/q, X/x, Y/y, Z/z のどの文字を含むかを分類させるものであった。

K2 の授業は、“If the dinosaurs came back,” というタイトルの物語の読み聞かせと“If the dinosaurs came back,” に続く文章を書くクリエイティブライティングであった。授業はクラス全員によるディスカッションによって、タイトルからどのようなストーリーかを想像させる活動から始まり、引き続きストーリーの読み聞かせが行われた。教師は、ただ単にストーリーを読み聞かせるだけではなく、途中で子どもたちに内容に関する質問をしたり、コメントを付け加えたりした。またジェスチャーによって、ストーリーを演出した。

読み聞かせの後、クリエイティブライティングのためのブレイン・ストーミング[4]が行われた。教師は、どのような内容を書くか子どもたちに問いかけるとともに、子どもたちの発言からライティングに必要となりえる単語をホワイトボードに書き出した（写真６参照）。その後子どもたちは、それぞれに文章を書く作業を行った。また、その内容に関わる絵を描く指示も与えられた。

どちらの授業でもストーリーが使われていた

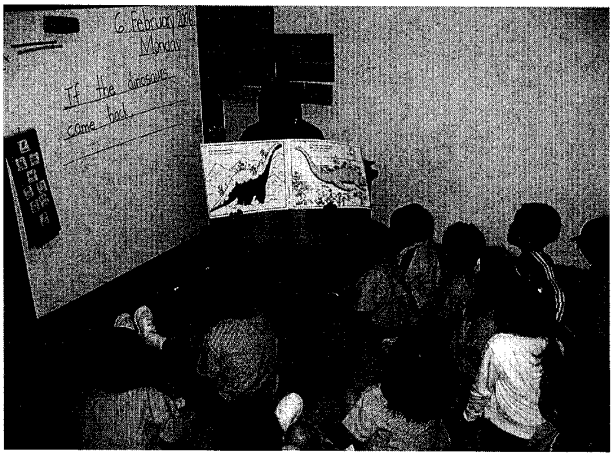

**写真４　K2 の授業風景**

ストーリーの読み聞かせの様子（筆者撮影）

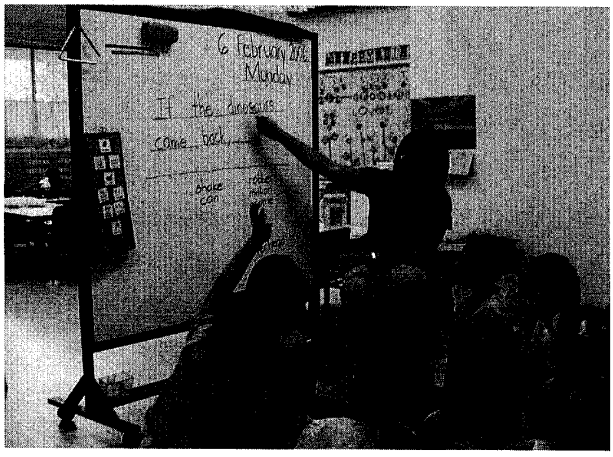

**写真５　K2 の授業風景**

ブレイン・ストーミングの様子（筆者撮影）

が、これは小学校英語教育との連携を意識したものであろう。奥村（2006）の通り、シンガポールの英語教育は、選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics）の影響を受けており、小学校英語授業ではストーリーなどの具体的場面を通して、言語の機能を学んでいく手法が取り入られていることが多い。したがって幼稚園の英語授業も、教師からの一方的な言語知識の提示やドリル演習に終始することなく、絵本などのストーリーを活用し、言語の機能を考慮した英語授業が行われることは妥当であろう。

今回の授業見学により、シンガポールでは幼稚園においても、英語授業は遊びではなく学習として進められていることが認められた。アル

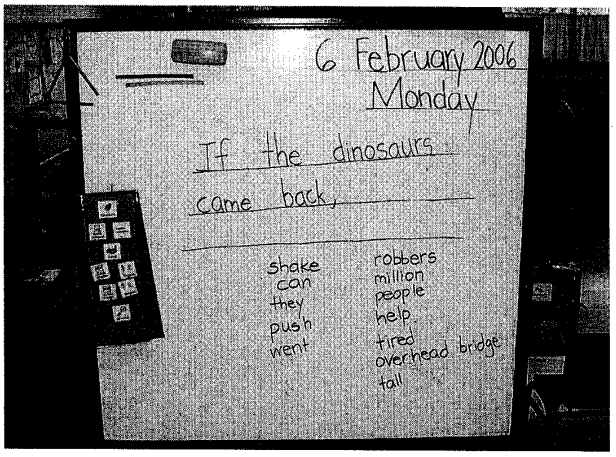


**写真６　K2 の授業風景**

ブレイン・ストーミングによって挙げられた単語（筆者撮影）

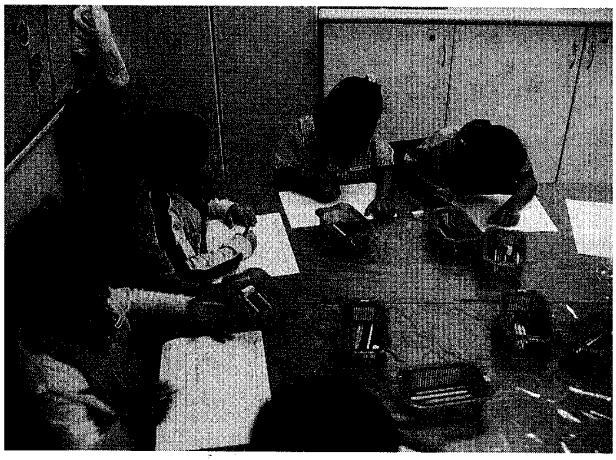

**写真７　K2 の授業風景**

ライティング活動の様子１（筆者撮影）

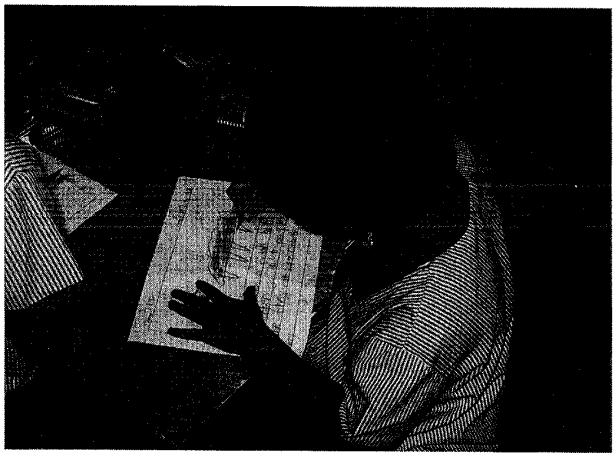

**写真８　K2 の授業風景**

ライティング活動の様子２（筆者撮影）

ファベットや単語を身につけるだけでなく、文章を読み、書くという活動を通して、小学校進学の準備を整えていると考えられる。特に、K2でのif節を用いたクリエイティブライティングは仮定法を用いた表現であり、幼稚園段階としては高度な内容であろう。このような内容を授業内容に盛り込んでいることは、やはり英語を第一言語とするバイリンガル国ゆえのものであるとともに、やはり就学前英語教育への保護者の期待に対して応えようとするものであると考えることができよう。池田(2006)は、保護者の強い要望から、就学前教育では知識を教え込む活動がいまだ多く、『フレームワーク』の理念がまだ現場に十分に理解されていないことを指摘している。また、保護者の中には自分の子どもが小学校1年次から学業において幸先のよいスタートを切ってもらうために、子どもを幼稚園への通園に加えて、英語、中国語並びに算数の準備コースに通わせるという実態もある。(The Straits Times, December 13, 2003)

英語習得が子どもたちの将来に大きく影響を及ぼしている以上、このように就学前の英語教育に対する保護者の意識はますます高まっていくと予想される。それにともない、さらに体系化されるとともに、学習効果を上げる工夫がされていくと考えられる。保護者とMOEの双方の理想が今後どこまで融合していくかに注目する必要がある。

## おわりに

今回のシンガポール幼稚園英語教育の実際を見学して、学習言語としての読み書き(リテラシー)能力獲得の重要性を再確認した。シンガポールの子どもたちは普段から日常会話を英語で行うことができるが、学校での教育言語としての英語は、やはり教授や訓練を通して習得していかなければならないものである。Cummins(1984)は、言語能力を基本的な会話言語力(BICS, Basic Interpersonal Communication Skills)[5]と認知学習言語力(CALP, Cognitive Academic Language Proficiency)[6]に分けて説明しているが、今回見学した幼稚園においてリテラシーを重視し、子どもたちがいろいろな単語を覚え、さらには文章をも書けるようにすることは、BICSではなく、CALPに焦点をあてていると言える。今後は、シンガポール人の幼稚園児たちがどの程度まで英語におけるCALPを習得することができるかを更に調査していきたい。これを英語リテラシーの発達状況から考察していくことは、バイリンガル教育研究を深めていく上で、大変意義深いことであると考える。

また、英語リテラシー発達の研究に際しては、子どもたちの母語の存在に注目することも肝要である。今後は英語だけでなく、各母語教育の実態を把握することと、母語と英語の発達における相関を調査することも必要となるであろう。

### 註

1 シンガポール幼稚園の教科統合型のテーマ中心アプローチ(Thematic Approach)の詳細については池田(2006)を参照していただきたい。

2 規則的に韻を踏んでいる詩(押韻詩)で、早期英語教育では歌と同様によく使用される。

3 アルファベットの文字が表す音を通して、つづり字と発音の関係を確認しながら単語の読み方を覚えていく方法。

4 小グループで自由に意見を出し合い、あるテーマに関するアイディアを出す手法。ライティングの指導においてよく用いられる。

5 日常会話などの比較的具体的で、抽象度の低い伝達内容を理解するために必要な言語能力。この能力は、当該言語の継続的な使用状況下において、2～3年程度の期間で習得できると言われている。

6 抽象度の高い思考が要求される認知活動と関連する認知学習言語力。4技能のうち、特にリーディングとライティングがこの能力を支援す

ると考えられる。この能力の習得は、当該言語の継続的な使用状況下において、５～７年程度かかると言われている。

## 引用文献


日本語文献

池田充裕（2006）シンガポール　池田充裕，山田千秋（編）『アジアの就学前教育―幼児教育の制度・カリキュラム・実践―』明石書店

奥村真司（2006）小学校英語教育における文法指導の考察～シンガポール英語教育の事例から『湘南短期大学紀要』第 17 号，pp. 17-25

英語文献

Cummins, J. (1984) *Bilingual Education and Special Education: Issues in Assessment and Pedagogy.* Clevedon : Multilingaul Matters

Sharp, P. J. (1997) Teaching and Learning at Home : Features of Parental Support for the Bilingual Competence of Pre-schoolers. *Early Child Development and Care,* 180, 75-83.

Sharp, P. J. (2000) "Features of Preschool Education in Singapore" In Tan-Niam, Carolyn and Quah, May Lin (eds.) *Investing in Our Future* : the Early Years. Singapore : McGraw-Hill.

Ministry of Education, Singapore (2003) *A Framework For A Kindergarten Curriculum In Singapore.* Retrieved October 24, 2006, from http://www.moe.gov.sg/preschooleducation/curriculum_framework.htm